

史跡広島城跡発掘調査（令和7年度）現地説明会

令和7年12月6日（土）

1 調査概要

広島市では、史跡広島城跡の整備に必要な情報を得ることを目的として、発掘調査を行っています。

今年度の発掘調査では、広島城跡天守台・小天守台石垣の最下部の状況や、広島城跡本丸部分の地形の成り立ち、戦後に公園として整備された過程について成果が得られています。

2 広島城の概要

広島城は、毛利輝元によって安土桃山時代の天正17(1589)年頃から築かれた、広島市中心部に位置する平城です。太田川デルタの地形を活かし、堀や川に囲まれた水運の要衝として発展し、広島の下町形成の中心的役割を果たしました。

広島城は近世・近代を通して中国地方の政治・軍事の拠点となっていました。昭和20(1945)年の原子爆弾の投下により天守をはじめとした近世から残されていた建物も失われました。その後、昭和33(1958)年に天守が外観復元されています。令和8(2026)年3月22日をもって天守は閉館となりますが、天守外観や二の丸復元建造物などは引き続き見学することができます。

3 調査全体図



4 調査成果

【T5-天守台】

天守台石垣南東隅部の石垣最下部の石は、現在の地表面から約 1.7m下に設置されています。堆積土の観察から、石垣の設置後すぐに現在の地表下約 0.6~0.7mの高さまで埋め戻されていたことが分かりました。この高さが築城時の地表面として整備されていたと考えられます。この最下部の石は非常に大きく、上に積まれた石垣よりも張り出しています。さらに、石の下にはやや大きめの礫（小石）が敷き詰められており、石垣を安定させるための工夫と考えられます。

石垣の石には、形を整えるための加工とは別に、美しく見せるための「化粧」と呼ばれる表面加工が施されることがありますが、今回確認された下部の石にはそのような加工がありません。設置後すぐに埋め戻され人目に触れないことが前提であったと推測されます。



写真1 天守台南東部

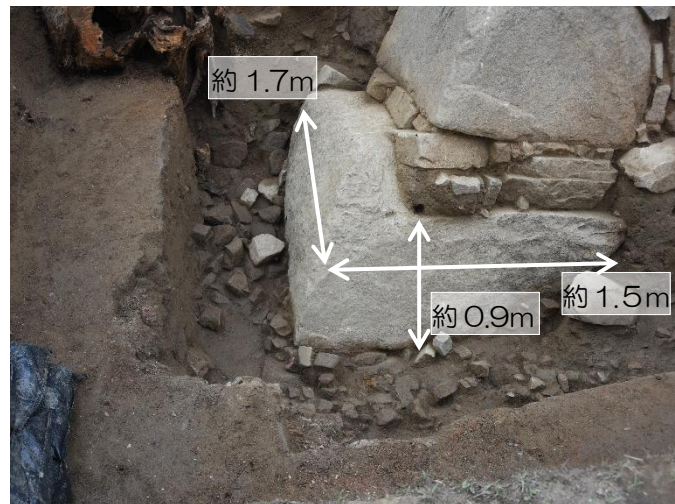


写真2 礫が敷き詰められた様子



写真3 埋め戻された様子

最下部の石の周辺に堆積している土を観察すると、粗い砂・細かい砂・より細かい粘質土などが不均一に乱れて混在しています。

自然にはこうした土の溜まり方はみられないため、広島城の石垣は人の手により盛り上げた土層の上に設置され、ある程度埋め戻されたものと考えられます。

これまで広島城は、太田川デルタの軟弱地盤の中で、標高の比較的高い部分を選びその上に築かれたと考えられてきました。

今回の調査により、これまでではっきりとは分かっていなかった広島城の成り立ちの一端が明らかになりました。

【T3—東小天守台】

東小天守台石垣南東隅部の最下部の石は、現在の地表面から約 1.4m下に設置されており、こちらも設置後すぐに現在の地表下約 0.8mの高さまで埋め戻されていたことが分かりました。この高さが築城時の地表面と考えられます。当時の地表面は、天守台から東小天守台に向かって約 0.3～0.4m下がっています。天守台周辺を最も高くし、雨水が自然に排水されるように工夫していたと考えられます。

また、最下部の石は、天守台最下部周辺の土と同じ特徴を持った土層の上に設置されていることから、天守台石垣が築かれてからあまり間をあげずに構築されたと思われませんが、詳細な時期は不明です。石は天守台と比べるとやや小振りなものが多いですが、石の形を整えるための「タタキ」と呼ばれる加工が綿密に施された石材が多く用いられているなど、石垣の構築技術の向上がうかがえます。



写真4 小天守台石垣基礎部

写真5 「タタキ」加工が顕著な石材と設置状況

5 まとめ（今回の調査で分かったこと）

【石垣について】

- 今回確認した石垣基礎は、いずれも石垣を積み上げた後すぐに 0.5～1.0m 程度埋め戻されていました。築城以来 400 年以上誰も見たことがないものと考えられます。これは周辺土層の観察に加え、地下に埋まっていた部分と、現在地上に露出している部分、双方の石垣にみられる石の表面加工（化粧）の有無によって明らかとなったものです。
- 確認された埋め戻し土の上面の標高を比較すると、天守台周辺が最も高いことから、周辺方向に雨水が自然と流れ落ちていくよう工夫されていたとみられ、石垣が作られた当初の地表面として整備されていたと考えられます。

【石垣設置面と自然地形について】

- 今回の調査で確認した天守台、東小天守台の石垣基礎は、人為的に盛土されたとみられる土層の上に設置されていたものでした。
- 広島城の築城に際し、人が積極的な地形改変（造成）を行った証拠が見つかったのは、今回の調査が初めてです。

【T1・T2・T4―天守台及び東小天守台北側】

見学者の安全確保の観点から見学対象とはしておりませんが、合わせて天守北側の発掘調査も行っています。本丸上段と下段の比較や、天守台・東小天守台の石垣と内堀石垣との関係を明らかにすることを主な目的としています。

【T1】

T1の北側の調査では、現在の地表の下約1.2mの深さを設置面として、約1.0mの高さの「裏石垣」を確認しました。裏石垣は自然堆積層の上部に人が盛土した層の上に設置されていました。

現在、内堀から天守台北側にかけての地表は平坦になっていますが、かつては内堀ぎわに約1.0mの高さの石塁があったものと考えられます。



写真6 確認した裏石垣(T1)

【T4-1・2】

東小天守台の北側の内堀石垣は、現在も地表面から約0.8mの高さで石塁状に高まっています。今回、東小天守台とこの内堀の裏石垣、それぞれの設置面の比較も行いました。

小天守台北東隅部(T4-1)の石垣は現在の地表の下約1.5mの深さに設置され、設置後すぐに現地表下0.6mの所まで埋め戻されていました。この面が築城時の地表面と考えられます。

これに対し、内堀の裏石垣(T4-2)は、小天守台石垣の設置当初の地表面を約0.3m掘り下げた所を設置面としていました。このことから、小天守台石垣と内堀の裏石垣では、その設置時期に違いがあったと考えられます。

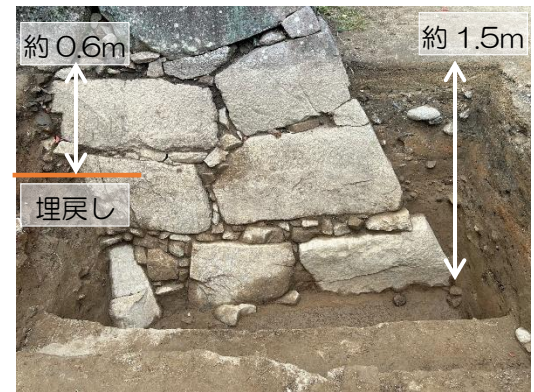


写真7 東小天守北東隅部(T4-1)

下の図は、天守台と東小天守台、内堀とその裏石垣を模式的に表したものです。調査成果から考えられる石垣設置面、築城時の地表面、現在の地表面を示しています。

現在の私たちが見ている広島城跡は、戦後、公園として整備した姿ですが、そこに至るまでの間には様々な出来事があったと考えられます。

発掘調査は、そうした埋もれた歴史を解き明かしていくため重要な手掛かりとなります。



写真8 内堀裏石垣の設置面(T4-2)

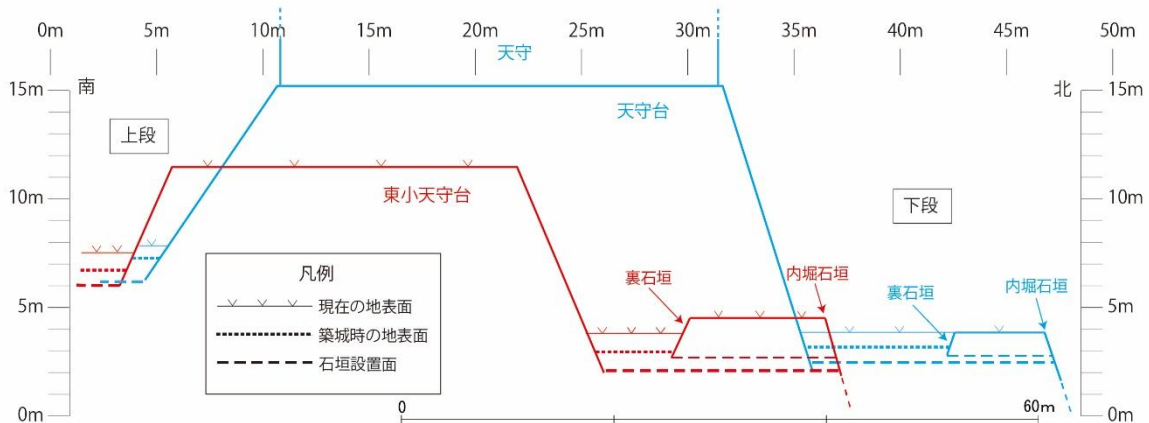


図1 上段～天守台～裏石垣～内堀石垣の断面模式図